

ツイッターライブ配信視聴者のための

令和2年度 経供養 解説

天王寺楽所雅亮会

☆「経供養」とは

江戸時代の「摂津名所図会」四天王寺法筵略記中に、「三月二日、未刻経堂経供養（中略）此日に震旦国より経論わたりし日なれば毎年経供養あり。秋野坊経巻を守護して伶人楽を奏し経堂太子堂の行道あるなり。太子堂西の庭上にて舞楽ある。これを俗に椽の下の舞という」とあります。

経供養とは、日本で初めて仏教経典が四天王寺にもたらされたことを記念して、毎年旧暦3月2日に四天王寺の太子堂の軒（椽 たるき）の下で行われていた舞楽法会です。現在は毎年10月22日に行われています。

古来この行事は非公開であって、舞楽も衆人の目にはふれなかったものでした。そこから大阪の方言の「椽の下の舞」ということばが始まったといわれています。人目につかず、太子堂の「椽（たるき）」の下で舞われたが故の名称ですが、エンという発音ももつ「椽」がいつの間にか「縁」に置換され、「縁の下の力持ち」＝縁の下のようない人目につかないところでコツコツと支えてくれる人、という慣用句へ転じたと考えられています。

本年は、コロナウイルス感染予防のため、参詣者をいれず執行ということになり、江戸時代と同様の非公開の経供養となりましたが、さいわいツイッターでのライブ配信がなされます。四天王寺様が作成された「経供養次第」と「経供養舞楽目録」とともに、当会からも次第と曲目解説、配役表を記載した「令和2年度経供養解説」を配信致しますので、ライブ配信での視聴の際の参考になさってください。

☆経供養次第

以下に本日の経供養次第を記載します。雅楽・舞楽曲は赤字で示します。ウイルス感染予防のために多くの点が例年から変更されています。変更点については下線でお示ししています。

先 道行 本来は本坊から出立するが、本年は楽人は楽席着座のうえ、猫之門から発楽して道行を短縮して行う。

- 次 入道場 衆僧は舞台上に列立。三綱(さんごう)と経櫃が通過。経堂正面に経櫃を安置。
- 次 伽陀 舞台上の衆僧により最初の声明「総礼伽陀(そうらいかだ)」が唱えられる。
- 次 集会乱声 衆僧が本座に着き、楽席より法要の開始を告げる集会乱声が発せられる。
- 次 鳳輦出御 振鈴第一節の新楽乱声が発せられる中、三綱によって、太子像を載せた鳳輦が安置されている奥殿が開扉される。
- 次 舞楽 振鈴 振鈴三節が舞われ、舞台が浄められる。
- 次 両舎利登高座 付楽「廻盃楽(かいばいらく)」が奏されるなか、法要導師の一舎利と副導師の二舎利が高座に登る。廻盃楽(かいばいらく)は明治以降廃絶した「遠楽」で、現在では四天王寺でしか聞くことができない。
- 次 風誦文 一舎利が法要の趣旨を述べる「風誦文」を黙読 引き続き法華経全巻を微音で読誦。
- 次 願文 二舎利が法要における祈願を述べる「願文」を黙読 引き続き法華経全巻を微音で読誦。
- 次 舞楽 蘭陵王
- 次 唄匿 付楽「仙遊霞」が奏されるなか、唄師が入場。声明：唄匿を唱える。
- 次 散華 唄匿に重なるようにして、衆僧が舞台上に登場。止楽。唄師の発音後、散華師が声明：散華を重なるように発音。引き続き衆僧も散華師に同音する。
- 次 大行道 本来は、楽人が先導して衆僧が舞台周りを練り歩く大行道が行われるが、本年は中止。
- 次 舞楽 登天楽
- 次 讚 唱えず
- 次 梵音 登天楽の後、付楽「延喜楽」が奏されるなか、衆僧が再び舞台上へ登場。声明：梵音を発音。
- 次 錫杖 梵音に続き、衆僧は声明：錫杖を唱える。
- 次 両舎利降高座 付楽「長慶子」が奏されるなか、両舎利は高座から降りて本座へ戻る。
- 次 入調 本来は参詣者の法楽のために舞楽が一曲奏されるが本年は中止。
- 次 鳳輦入御 三綱先導のもと、太子殿が閉扉され、経櫃をたずさえて還列の準備を待つ。
- 次 還列 本来は楽人が先導して、本坊へ還列するが、本年は楽人着座のまま発楽。衆僧の列が猫之門から退出するまでの送り楽となる。 衆僧は楽にのって太子殿から退出。

☆当日の舞楽曲目解説

舞楽 振鈴

舞人：左方 園淵和夫 右方 寄氣恵秀

主管：左方龍笛 中原詳人 右方高麗笛 山本恵子

古代中国、周の武王が商郊の牧野に天神地祇を祀った故事に因んで作られた舞と伝えら

れています。古来、法会や神事における舞楽演奏の冒頭において、演舞の場の邪気を払い清める意味をもって必ずこの舞が奏されるならわしとなっています。

舞は三節から構成され、第一節目は横笛と太鼓、鉦鼓による新楽乱声（しんがくらんじょう）が奏され、左方襲装束（かさねしょうぞく）を着けた左方の舞人が鉦を奉持して登台し、これを左右上下にうち振って舞います。

続いて第二節目は高麗笛（こまぶえ）と太鼓、鉦鼓による高麗乱声（こまらんじょう）が奏される中、右方襲装束の舞人が登台、同様に鉦を振ります。

最後の第三節目は新楽、高麗両乱声（らんじょう）が奏される中、左右の舞人が揃って舞います。これを特に「合鉦（あわせぼこ）」といいます。笛と鼓鉦のみの伴奏や、大変儀式的要素の濃い舞振りなどから、舞楽曲の中では特異な舞であるといえます。

舞楽 蘭陵王

舞人：小野真龍

主管：龍笛 勘田紅美 箏築：高木了慧 鳳笙：塩田隆志

あまりにも眉目秀麗であったがため、戦いのぞんで敵を畏怖させることができず、つねに金色の恐ろしい形相の仮面を着けて戦場に赴いたという古代中国北齊の王、蘭陵王長恭の伝説に基づいてつくられたのがこの舞であるといわれています。また、この曲が天平年間に、現在の北ヴェトナムあたりに存在した林邑（りんゆう）国の僧侶哲によってわが国に伝えられた林邑楽中の一曲でもあるとする立場からは、七世紀頃東南アジアに盛行していたインド神話に基づく「竜王の喜び」という仏教歌劇の主役である竜王の姿がこの舞の起源であるともいわれています。

まず、舞に先立って横笛の主管と太鼓、鉦鼓の奏者によって「小乱声（こらんじょう）」が奏されます。これは舞の前奏曲ともいべきものです。次に鞆鼓、太鼓、鉦鼓の奏者による単純な四拍のリズムを反復する「乱序（らんじょ）」に入りますと、毛縁りの裱襦装束（りょうとうしょうぞく）に金色の仮面を着け、手に金色の桴を持った舞人が登場し、※「出手（ずりて）」を舞って舞台中央に立ちます。

続いて、軽快で民謡的な旋律の当曲に入りますと、舞人は舞台を縦横に動きながら、あたかも軍勢を指揮するかのような勇壮な舞ぶりを繰り広げます。

最後は「安摩乱声（あまらんじょう）」が奏される中「入手（いるて）」を舞い堂々と退出して行きます。

※一般的には「でるて」と読まれますが、天王寺楽所では「ずりて」といわれます。

舞楽 登天楽（とうてんらく）

舞人：神田典証 多治見真篤 丸川司文 今野宏昭

主管：高麗笛 山本恵子 箏築 吉本乗亮

この舞の由来については定かではありませんが、一説には天を目指して昇って行く龍の

姿を象った舞であるといわれています。朝鮮半島伝来の舞楽の様式である右方高麗楽（こまがく）に属していますが、この様式を借りてわが国で創作された舞であるともいわれています。

先ず箏篳、高麗笛の主奏者による序吹（じょぶき）に次いで拍節的な楽曲に入りますと、巻纓冠（けんえいのかむり）に黄色地の袍（ほう）を着けた蛮絵（ばんえ）装束の四人の舞人が舞台上に現れ、順次出手を舞って所定の舞座につきます。舞が始まりますと、手首を回転させる「ギロリ」や、腕を回転させる「フリガイナ」と称する舞の所作が何度も繰り返され、この舞の動きを特徴づけます。優雅な中にも軽快さを感じさせる舞といえます。

天王寺楽所雅亮会

令和2年度 経供養参仕者

楽行事 （左方）藤原憲 （右方）蓮沼善行

舞人

振鉦 （左）園淵和夫 （右）寄氣恵秀

蘭陵王 小野真龍

登天楽 多治見眞篤 丸川司文 神田典証 今野宏昭

管方

羯鼓・三ノ鼓 寺西覚水 太鼓 巖水法光 鉦鼓 和田敦子

龍笛・高麗笛 中原詳人 勘田紅美 奥田英織 山本恵子

箏篳 前川隆哲 高木了慧 多田真門 吉本乗亮

鳳笙 林絹代 塩田隆志 邑上紀子 楠行正

装束方 吉光信昭 北中廣興 眞藤眞